

平成 30 年 5 月 25 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2017

課題番号：25370716

研究課題名(和文) 視聴覚メディアにおける言語とイメージの日独英翻訳比較研究

研究課題名(英文) A study of the interaction between language and visual images in Japanese, German and English audio-visual translation.

研究代表者

藤濤 文子 (FUJINAMI, FUMIKO)

神戸大学・国際文化学研究所・教授

研究者番号：40199352

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：マルチメディア化が進む現在、言語と非言語の両者を含むジャンルの翻訳において言語のみに焦点を当てるだけでは限界がある。本研究では特に画像を含むジャンルの翻訳で、言語と非言語間の情報の移行(モード間翻訳)について分析の枠組みを提案するとともに、日独英の三言語で原文とその翻訳を比較し、言語と非言語が担う情報に生じるズレとその傾向、および作品全体の評価づけへの影響を機能主義的観点から明らかにした。

研究成果の概要(英文)：In multimedia translation, focusing on language alone is not enough. In this research, a framework is proposed for analyzing the transmission of information between language and visual images (i.e., translation between modes). By comparing source texts with target texts in Japanese, German and English, three things have been clarified: the shifts between language information and nonverbal information in individual cases, their overall general tendencies, and their influence on the evaluation of the whole target text from a functionalist point of view.

研究分野：翻訳研究

キーワード：視聴覚翻訳 機能主義的翻訳理論

1. 研究開始当初の背景

(1) グローバル化とマルチメディア化が急速に進む現在、異文化間のコミュニケーションのあり方が多様化してきている。同一状況においても何を言語化して表現するか、または言外の文脈や非言語チャンネルで伝えるかは言語文化により異なるものであり、それについての知識は異文化間でコミュニケーションを行う上で重要である。特に多言語でホームページを作成したり、取扱説明書を海外向けに作成したりする場合などには、翻訳という作業が介在するが、翻訳研究においてはまだ言語の変換に焦点が当たっており、非言語要素とのインタラクションについては研究が遅れている。

(2) 翻訳研究においては、非言語要素が研究対象として取り上げられることはまれであった。「記号間翻訳」という概念で、言語記号と言語以外の記号の間の翻訳に初めて言及したのは R. ヤーコブソンであり、1959年のことであったが、その後テキスト内に言語と非言語の両方の要素を含む総合テキストの翻訳に注目したのは K. ライスである。ライスは、1971年にテキストタイプ別翻訳理論を提唱し、言語外の媒体が重要な役割を演じる歌や演劇などを視野に入れた「聴覚メディア型テキストタイプ」を挙げ、その後マンガも含む「マルチメディア型テキストタイプ」を提案した。このタイプに入るジャンルは多様であり、非言語要素の関与の度合いも様々である。例えば、ラジオ劇での効果音、テレビドラマの映像、合唱曲の音楽的要素、演劇における衣装や舞台装置など、非言語要素にも様々な種類があり、それらの関与について翻訳者や翻訳批評家は考慮する必要があったとした。その後、翻訳研究において非言語要素を含むジャンルは徐々に関心を引く研究対象となり、例えば視聴覚翻訳の研究は90年代以降に、絵本などの児童文学やマルチモード性の高い広告やビデオゲーム等のジャンルの翻訳も2000年以降に徐々に研究がなされるようになってきた。

(3) 機能主義的翻訳研究では、ある文化では言語で表現されることが、別の文化では非言語で表現されることがあるという前提から、何を言語化するかは文化により異なるとする。したがって、原文の言語情報を翻訳して非言語化したり、逆に原文の非言語情報を翻訳して言語化したりすることもありえると考えられる。翻訳における非言語要素の研究には、翻訳行為研究の射程内に言語と非言語の両者を入れる機能主義的翻訳研究の枠組み(特にスコポス理論)が有効と言えるが、日本では、この理論的枠組みがまだ十分研究されているとは言えない状況である。

2. 研究の目的

(1) 本研究では、翻訳においてテキスト内

での言語要素と非言語要素のインタラクションのメカニズムを明らかにすることを目指す。具体的には、非言語要素の中でも視覚情報である画像(image)に重点を置いて、言語・非言語の両チャンネルを含むテキスト(具体的には絵本・マンガ・映画など)が翻訳される際に、

言語が担う情報と非言語が担う情報に、ズレが生じるかどうかを調査する、

日本語・ドイツ語・英語の3言語を比較して、そのズレにどのような傾向が見られるかを明らかにする、

そのズレによりテキストの機能にどのような変化が生じるかを明らかにする。

(2) 翻訳における言語・非言語のインタラクションを研究する研究の枠組みを確立することを目指す。非言語要素もテキストの大前提として認める機能主義的翻訳研究に基づき、具体的な分析方法を提案する。

3. 研究の方法

(1) 言外の意味やイメージは客観的検証が難しいが、視聴覚メディアという、言語と非言語の両方のチャンネルが含まれるテキストにおいては非言語要素が観察可能である。そこで言語と非言語の両方のチャンネルが含まれるテキストを分析対象として、日独英の3言語で機能主義的翻訳研究の枠組みから比較分析した。具体的には、絵本・マンガ・映画・雑誌などの言語と非言語の両者を含むジャンルの原文とその翻訳版を用いて、言語と非言語のインタラクションについて、数量的分析と質的分析の両面から比較対照を行う。

(2) 具体的な比較対象分析は以下の手順でおこなった。

第一段階として、絵本・マンガ・映画・雑誌の各ジャンルの、日独英の3言語版が揃った作品を国内外から収集する。

第二段階として、言語・非言語のインタラクションを分析できる方法論を機能主義的観点から確立する。

第三段階として、具体例の分析をジャンルごとに行う。その際、各ジャンルの翻訳の特殊性を先行研究から確認する。

4. 研究成果

(1) グローバル化とマルチメディア化の進む現代において、異文化間コミュニケーションの在り方が多様化しており、そうした状況における翻訳・通訳の社会的役割も変化しており、単に言語の変換のみという捉え方では実情に合わなくなっている。そうした状況を受けて、言語チャンネルと非言語チャンネルの両者が含まれるジャンルとして、具体的には挿絵入りの書籍・映画・マンガ・絵本・雑誌といったジャンルを、日・独・英の原文と翻訳を用いた三言語での比較により、言語と非言

語のインタラクションを質的・量的の両側面から調査・考察した。その結果、A 言語から B 言語への言語間の変換のみならず、A 言語が B 非言語へと対応する事例や、逆に A 非言語から B 言語へと対応するケースが確認できた。

(2) 言語と非言語間の情報の移行について本研究では「モード間翻訳」と名付け、その分析の枠組みとして「三段階分析法」を提唱し、研究論文として発表した。非言語要素に着目した基本分析モデルとして、次の3段階を設定した。

第1段階として、「画像間翻訳」あるいは「非言語間翻訳」の分析である。画像そのものが翻訳過程で加工編集されて物理的に変更が加えられているかが観察されるかどうかの分析である。

第2段階として「モード間翻訳」ないし「非言語・言語間翻訳」の分析である。非言語・言語要素間の関係に変更が生じているかどうかであり、翻訳者が原文の絵から情報を読み取って言語化することを指している。つまり画像 A から言語 B へのモード間の転移である。ただし画像が残る場合は、言語化された情報は追加された重複情報となり、モード間で冗長性が高まることになる。画像に物理的変更がなく一見すると同じように見えても、言語情報の追加変更に伴い画像のもつ情報価値に変化が生じることにつながる。

第3段階として「非言語機能」の分析である。人間の処理能力の限界から、画像の情報のほんの一部しか注目され認識されない。とすれば、同じ画像であっても、その中の何をどう見るか、どの観点に着目し、どの方向で解釈して意味づけるかは、そこに添えられる言語情報による「意識化」に影響を受けることになるだろう。画像は言語ほど記号としての意味が明確ではないため、幅広い解釈の可能性をもっており、したがって言語とのインタラクションによって様々な機能を持ち得ると言える。

(3) この三段階分析法を用いて絵本作品の翻訳を分析したところ、日本語原文においては絵と文から理解できる情報が、英語訳およびドイツ語訳においては、絵を言語化するモード翻訳の事例が多く発見できた。つまり、言語による描写が追加されるという明示化傾向が顕著に確認でき、原作における絵の役割に変化が見られた。さらに原文と訳文の言語部分の対応関係を調べたところ、ほとんど対応関係がなく、むしろ非言語の絵に合わせて翻訳文を再構成して創造しているケースさえ見つけた。そのようにして翻訳された作品が受賞さえしている。

(4) また挿絵入りの書籍やマンガの翻訳においては、縦書き右開きの日本語と、横書き左開きの独英語とでは、読み進める方向が異なると、絵が反転される。しかし詳細に見ていくと、全ての絵が自動的に反転されているわけではなく、編集者の工夫が凝らされている箇所が随所で確認された。また、マンガ翻訳についての先行研究では、フランス語版経由でドイツ語訳された作品で、左開きに反転されたフランス語版を媒介して右開きのドイツ語版を作成したところ、部分的に反転が残ってしまった例などがあることも分かった。重訳の影響や読者の好みの影響が非言語要素に及ぶことが分かった。

(5) グローバル雑誌の例では、翻訳を再文脈化のプロセスと捉えて分析した。同じ原文であっても、翻訳対象の記事選定、写真選定、ページ配置などの雑誌媒体の全体構成において編集者の介入があることをまず確認した。写真がそのまま使用されることにより、ときに第三世界を未開で野蛮とする表象が強烈な印象とともに拡散されることを指摘した。また翻訳過程で言語・非言語両面での大小様々な変更を加えることで、テキスト全体をどう評価付けるかのスタンスの違いを浮き彫りにした。異なる文化社会の読者の関心や価値観によって変容が生じ、再文脈化が起こることを具体的分析で明らかにした。

(6) こうした研究成果を公表していく中で国際的にも注目を集めることとなり、中国および台湾で開催された国際シンポジウムに2年連続で招かれて基調講演を行ない、活発な意見交換ができた。

(7) さらに本研究の特色として挙げていた機能主義的翻訳研究の、最も重要なドイツ語文献を本研究の過程で精読してきたところ、研究の副産物として、解説付きの日本語訳を完成させることができた。その成果を『スコポス理論とテキストタイプ別翻訳理論』と題して2018年度中に出版できる運びとなった(研究成果公開促進費に採択)。これは本研究で分析対象としたジャンルの翻訳研究では欠かせない理論的基盤であり、日本でのこの種の研究の進展に貢献できると思われる。また、2016年秋に行った中国での国際学会のシンポジウムでの招待講演の際に交流した天津外国語大学の教員等からの申し出で、拙著『翻訳行為と異文化間コミュニケーション』が中国語訳され、2018年1月に刊行されたことも、本研究の副産物と言えるだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 5件)

(1) 藤濤文子、グローバル雑誌の翻訳にお

ける再文脈化について 言語テキストと
写真の英日独比較、国際文化学研究、査
読無、48号、2017、165-182
[http://www.lib.kobe-u.ac.jp/infolib/m
eta_pub/G0000003kernel_81009891](http://www.lib.kobe-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000003kernel_81009891)

(2) 藤濤文子、モード間翻訳による非言語機
能の変更について 3段階分析の枠組みを
用いて、翻訳研究への招待、査読有、15
号、2016、19-32
[http://honyakukenkyu.sakura.ne.jp/shot
ai_vol15/No_15-002-Fujinami.pdf](http://honyakukenkyu.sakura.ne.jp/shotai_vol15/No_15-002-Fujinami.pdf)

(3) 藤濤文子、翻訳とパラテキストとしての
挿絵 プロイスマーの作品を例に、
国際文化学研究、査読無、42号、2014、
89-103
[http://www.lib.kobe-u.ac.jp/infolib/meta_
pub/G0000003kernel_81008915](http://www.lib.kobe-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000003kernel_81008915)

〔学会発表〕(計 5件)

(1) 藤濤文子、グローバル時代における翻
訳の役割と再コンテクスト化、2017年度
輔仁大学日本語文科学科・台湾日本語文科学会
国際シンポジウム、基調講演(招待)、
2017.12.16、台北(台湾)

(2) 藤濤文子、異文化間コミュニケーション
と翻訳研究、国際シンポジウム「国際化
視野中的日漢語言対比及翻訳研究」
2016.10.23、基調講演(招待)、天津(中
国)

(3) 藤濤文子、視聴覚翻訳における言語・
非言語の相互行為 機能主義的翻訳研究
の立場から、2016.10.22、招待講演、天
津(中国)

(4) 藤濤文子、翻訳における非言語要素の
役割、日本通訳翻訳学会第16回年次大会、
201.9.13、青山学院大学(東京都)

〔図書〕(計 2件)

(1) 藤濤文子(監訳)、昂洋書房、スコポス
理論とテキストタイプ別翻訳理論、2019、
240

(2) 藤濤文子、南開大学出版社、翻訳行為
与跨文化交際、2018、127

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：

出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者
藤濤 文子 (FUJINAMI FUMIKO)
神戸大学大学院国際文化学研究科・教授
研究者番号：40199352

(2) 研究分担者
()

研究者番号：

(3) 連携研究者
()

研究者番号：

(4) 研究協力者
()